

民、女子等的中立和安全应该得到保障。

日本是一个四周环海的岛国，所以在日本只住着日本人。日本人对外国人的一切很不熟悉，可是却曾侵占台湾、韩国，侵略中国及周边各国。当然到头来四面楚歌。后来，日本被美国占领，但其占领方法充满了绅士风度，所以日本人就产生了看待外国人过于天真的毛病。对他人戒心不足，则是日本人的特点。

比较一下日本人与中国人的居住模式，也明确反映了这一特点。当然有气候不同这一因素的影响，但社会关系的差异也是很明显的。

对于中国人来说，住房中最重要的是墙壁，有墙壁才可安居。围壁盖房，房周围再建院墙，院子位于房宅基地中心。

而日本传统的住房则没有墙，房顶与地板是基本结构。住房可以从外面一览无余，连篱笆都没有，直接与外界连通。日本房子是用推拉门窗将空间隔开，可以自由拆装。这种盖房方法与在南方岛屿居住的海洋民族是共通的。日本人所以固守于这种“自家房产，独门独院”，是这种居住感觉的结果。

塌塌米就是这种没有墙壁的日本住房的象征。由于冬季寒冷，所以，300多年以前即开始

在板子之间铺用稻草编织的塌塌米。起初，这不过是为主人铺的坐垫，到后来才逐渐扩展到房屋各个角落。在塌塌米以下，打上龙骨，使其下面构成一个空间。日本夏季湿度大，所以必须注意通风。在中国，特别是北方，如果像日本那样盖房子的话，到了冬天不用多久就会冻死。在日本，人们得利于大自然，安全也是无偿的。

由此看来，只有构筑了万里长城的中国才是达到了世界标准的文明社会，而日本则是例外。

中国惯于位居世界中心的地位，而日本则惯于充当世界周边的角色。中国人认为一切好东西都在中国，而日本人则认为一切好东西都在外国。所以，日本人不抵制引进外国的东西。这一点王辉院长在书中曾一再指出。如果说为什么日本人善于模仿外国，大概就是因为日本人没有防备外来干扰的自尊心吧。

政治擅长的中国人与政治弱项的日本人

由以上分析可以看出，西欧与中国共同点很多，但也有相悖之处。其中最重要的是两者对待政治的态度不同。

首先，让我们给政治下一个定义。

简单地说，政治就是人统治人的现象。某一

个统治者一旦做出某个决定，其他人就要予以服从。这种结构在统一社会意志方面是必不可少的。

政治的这种本质，任何国家都是共同的，但对于政治的态度，则因文化而异。

例如基督教，当然伊斯兰教、犹太教等也一样，这些教会文化反对人统治人。为什么呢？因为应该由神来统治人，而人则应服从于神。如果人来统治人的话，那么统治者就冒渎了神，而服从者则崇拜了偶像。总之，这都是犯罪。于是，他们想出了各种各样的控制方法。例如，国王加冕，教会保证，这个统治者是拥护和信仰神灵的。再有一点就是法的统治。人们具有遵守对神的契约即法的义务。如果以此为挡箭牌的话，就可以防止统治者的暴虐，就可以要求统治者也要守法。

基督教所以能产生民主主义，是因为有这种原则。民主主义将国王从统治地位上赶下台或使其徒有虚名，人民成了政治的主人公。它还要求那些制定法律、从事政治的人们也要严格遵守法。

在中国因不存在相当于诸如基督教中所谓“神”之类的东西，所以也不忌讳什么人统治人。

按中国的传统思想，反而认为人统治人天经地义，是正确的。于是后来就演变成了如何选拔符合政治家条件的人物，使其从事政治的问题。

中国人认定的优秀政治家的条件，第一是才能，第二是品德。

政治是对结果负责。无论怎样拼命搞政治，如结果不尽人意，那么政治家就是失守职守。在中国这一原则非常严格。并且，在中国为了发挥政治上的领导作用，必须通过中国社会的所谓长幼之序以及亲属间的权利义务等行为规范使之得以实现。孝敬父母，恪守信义，作为优秀的中国人必须身体力行，才能得到人们的尊重，他的政治统帅地位才能得到社会的承认。一般认为，政治家优秀的个人素质，是圆满从政的必要条件。如果无德，即使有才能人们也不会认可，作为政治家则更不会成功。

中国采取科举制旨在选拔德才兼备的人物。能够熟读儒教古典本身就说明他有才能，而儒教古典则是对中国人行为规范的概括和总结。中国的这一做法能得到人们的认可本身，也说明了政治在中国深受重视，政治一旦崩溃，社会将陷于混乱。中国人非常重视政治的正统性。

在不承认有绝对的神明这一点上，日本与

中国是一致的，但日本对于人统治人的做法却一直是反对的。政治的客观存在无法改变，但一般日本人的想法在于尽量不让其发挥作用。例如，古代日本从中国引进了律令制这一古代优秀的政治制度，可是过了一段时间后便变得有名无实。最近，日本又向美国学习了民主主义思想，可一实际应用又完全改造成为日本式的了。日本人不擅长政治艺术。

实际上任何社会都离不开政治，然而日本人却希望没有政治。他们认为人人平等，不喜欢那种明目张胆的统治，因此，领导人无论决定什么都期待一致的意见。即使按自己的想法得到了结论，也要说成是大家的意见，决不说是自己决定的。这种做法，对于领导人来说，不会被追究责任而感到安心；对部下来说，也因领导人不独断专行而感到放心。

日本人成立的组织，往往不知道里面是否有什么带头人。组织成员们都认为这个组织是自己的，将它称为“我们公司”、“我们部门”，归属意识很强。为此出现了许多忘我工作的人——“公司人”。本来诸如公司、学校之类的组织只要具备一定的社会机能就可以了，没有必要具备更多的机能。然而在日本，因为周围的人们

的突发事变，平时就得好好地维护这种亲朋关系。这既是中国的传统道德，也是一种保险机能。

中国的人际关系，从完全无关或潜在的敌对关系，到非常重要的关系，可以把它划分为几个不同的层次。行为可能因对方所处层面不同而不同。以做买卖为例，因买主与自己的关系不同，而会分别采取要挟、减价、或干脆白送的做法。中国人目之为当然，日本人则难于接受。

与中国相比，日本社会一直安定，日本的政府和权力相对软弱。虽然也有过战争，但一般民众的生活没有受到什么影响，诸如个人私有土地财产无辜被没收或被迫移居他乡等等，几乎历史上没有一例。相反，国有土地也不知什么时候变成贵族的庄园或农民的土地，对此谁也不觉得不可思议。根据1200年前的法律，日本的土地曾为国有。

在中国，无论你有什么，只要不被他人承认，就不能保证其所有权。但日本就可以保证。所以日本人固守于对物的所有。兄弟、亲戚等也会因财产继承问题感情相悖，变得不可信赖，朋友等更不可靠，最后可依赖的只有物。

中国人认为日本社会的人际关系非常淡

都这样做，自己也不得不采取同一模式而丧失立场。由此一来，日本所有的组织就都变成了容纳全部人格、使之赖以生存的共同体集团，这就是日本社会的特征。

寻找可信的中国人与寻找可信物的日本人

与此相关的是中国与日本不同的人际关系。在中国人看来，日本人多少有些冷漠无情。亲朋好友有事相求，竟加拒绝，并非互相感情不好。因此，中国人不知道日本人在想什么，往往认为日本是一个冷酷的民族。

另一方面，在日本人看来，中国人具有为人偏激的双重人格。对不认识的人冷漠无情；而对认识的人则态度截然相反。中国不平等，是“关系”社会。

中国和日本两方面的想法，都不能说是错的。但这都是以本国的标准来看待对方而得出的片面结论。如果对对方能进一步理解的话，则可以会得到另外的结论。

在中国，最重要的是政治。若政治混乱，异族入侵，则天下大乱。当然，土地、房屋、财产也随之付东流。抑或以身免而流落他乡，那时最后可以依赖的便只有亲朋好友。为此，考虑到将来

薄，其原因大概就在于日本的行为规范是以物为基准的。

对日本人来说，公司、学校等都是重要的集团。然而，一旦辞职或毕业离开那个团体，原则上便与之脱离了关系。非但如此，甚或缺席了某次会议，这个人也会被忽略，而会议内容照旧进行。如果不经常参加那个“场”，便不被认可为那个集团的成员，这一点与中国的“单位”大不相同。

对日本人来说，重要的是自己现在的所属部门，即作为“场”的那个集团才是效忠对象。亲朋好友不在那个“场”里，所以不具有任何影响。即使在同一公司内部，例如从营业部门调入财务部门的话，他的处境就发生了变化，大概是“场”的变更的缘故。在这个社会，人与人之间很难结成固定、稳定的关系。

日本人这种行为方式在近代化过程中曾起了积极作用。对于“场”以外的人，无论是亲朋好友也好，素不相识的人也好，都一视同仁。因此，行政机关就可以按规则运作，做买卖也可以不分对象，实行同一价格。否则，就没有合理化、近代化必不可少的量化概念。

21世纪为什么是中国的时代？

要理解中国，还有一点不可忽略的，就是汉字。

汉字是世界上独一无二的表意文字。在战火纷飞的战国时代即已整理成与现代汉字相近的形式。

古代的中国为什么采用了表意文字？其原因在于当时的中国正处于多民族的战乱状态。如果中国不是一块大陆，而是被诸如地中海或阿尔卑斯山等海洋或山脉隔开的话，现在大概也会像欧洲那样变成多民族各自为政的局面。

实际上，北京话与广东话，从语言上看，或许比英语与意大利语之间的差距还要大。但两者都是中国话这一点则多亏了汉字的功劳。汉字产生时，中国还不存在所谓的中华民族，各地区都分别用着不同的语言。汉字不管其发音如何，都是表达了一种语义，这种语义可以按照各地区的读法进行发音。正是这种表意文字，才把本来由不同民族组成的中国从文化的角度统一成为一个国家。

汉字使用以后，人们的语言也发生了变化。过去可能有过的诸如时态、人称变化、变格等现象消失了。因为汉字是象形文字，很难表达那些

变化。在这个意义上看，汉语可能是人为的语言。

欧洲现在正准备结成将若干国家和民族统一起来的欧洲联合 EU。如果成功了，欧洲才会展现出一个超越国家的国家，一个政治的、文明的整体姿态。而中国，在大陆另一端，两千年前即已实现了多民族统一的中华联合。世界可以从中国的经验中得到很多教益。

过去的一个多世纪，日本与中国走着不同的道路。

在中国，毛泽东领导的中国革命取得了辉煌的成果，但总的说来经济还是停滞不前的。想一想，中国在历史上几乎一直居于世界大国的地位。与历史上的中国相比较，20 世纪中国所处的地位与本来的中国极不相称。然而，邓小平实行改革开放政策以后，中国才开始了顺利的发展。照此发展下去，在不久的将来，中国将恢复其世界大国的地位。

那时，在中国面前，将会展现一个怎样的世界呢？

日本能捷足先登发展之路是因为日本不拘泥于传统文化。中国不能舍弃传统文化。中国以对本国文明及制度的自信而将它视为世界标

准的。然而，欧洲世界以另一个强有力的世界标准，创造出了独特的宗教、价值观、科学、技术和社会制度。这些被中国完全认可似乎还需要时间。

中国与日本不同，中国保留着浓厚的固有的传统文化，中国是以超级大国的姿态登上历史舞台的。如果回顾一下中国的历史，可以说中国有这种资格。这一点对于近几百年以欧洲文明为中心的世界来说，完全是一种新鲜的经验。中国将超越自身传统的价值观与欧美价值观的对立，就人类文明的新阶段贡献出新的方案。对于创造了汉字并实现了多民族统一的中国来说，可望完成这一历史使命。

中国人应参考日本的什么呢？

中国本身就是一个宇宙，一个世界，所以易于对外面的世界视而不见。而欧洲和日本却在中国闭目养神之机拼命吸收了外来的知识。

王辉院长介绍的日本片断，告诉人们在中国的近邻有一些与中国有不同思维方式的人们。在生活方式、思维方法以及城市风貌等方面，中国与日本格外相异这一点，大概谁都会感兴趣吧。读了这些关于日本的描写，不由得产生了这样一种心绪，生活在不同国度的人们，其感

情大概是世界相通的。

若将经营管理的方法、交通体系的整備等一些具体问题另当别论的话，我并不认为已经开始向超级大国奋发勇进的中国现在正好有值得向日本学习之处。过去，中国走了一条中国式的道路，今后也还会沿着中国独特的道路走下去。只是中国人要很好地认识一下中国独自的道路应该怎么走，而邻国日本的经验，或许多少有些参考价值。

中国若向日本那样舍弃传统文化来实现现代化的话，中国将会失去同一性而甚或解体。另一方面，中国若过于固守独自的价值观和特色的话，中国与国际的对立则会进一步加深。围绕人权问题美国与中国的角逐，或许就是前哨战。

因此，我认为选择中间的道路，既保持中国文化的独自性，又谋求与世界的协调之道，既可望又可及。为此，过去往往内向的中国人，将会对日本等外国文化产生兴趣，加深理解以至产生共鸣。中国人若向世界展示出这种愿望和自信的话，我觉得就可以对 21 世纪的地球社会抱有希望了。

似て非なる国、中国と日本

橋爪大三郎

外見から、中国人と日本人を見分けることはむずかしい。と言うか、ほとんどそっくりである。そこで、中国人と日本人は、中身までよく似ているのだらうと、うっかり錯覚してしまいがちである。

ところが、ものの考え方となると、中国人と日本人ではかなり違っている。むしろ、正反対と言ったほうがいいくらいだ。中国には中国の、日本には日本の文化があって、その中身は別々なのである。

これが欧米人のように、われわれと皮膚や髪の毛の色が違っていけば、ものの考え方や文化がどんなに違っていても、なるほどそうかと納得しやすい。でもよく考えてみれば、外見のよく似たアジア人同士だからといって、そうした違いがないことにはならない。

日本は中国から、千年以上にわたって数々の文化的影響を受けてきた。漢字も仏教も、茶や衣服や建築も、律令その他の社会制度も、みな中国から伝わったものである。そのため、表面的に見れば、日本の文化は中国と似通っている。けれども、根本のところ（人びとのものの考え方や行動のパターン）は、やはり日本独自のものを残している。

本書・王輝院長の日本訪問記は、一つひとつが短い文章でありながら鋭い観察眼で、的確に中日双方の文化の違いを浮き彫りにする。それは、中国で行政官としての豊富な社会経験を積み、同時に優れた社会学者でもある、王輝院長ならではのものだ。日本のごく普通の人びとがどんなに暮らしているのか関心をもつ中国の読者にとって、なかなか興味深いであろう内容となっている。のみならず、日本人にとっても、本書は新たな発見に満ちている。王輝院長の活き活きとした筆致にとらえられた日本社会の新鮮なイメージは、われわれが自分たちの社会を中国という鑑に照らして振り返ってみる、よい手がかりになる。

*

私が中国を訪問する場合、王輝院長とちょうど逆の立場になる。

私はこれまで十回ほど、天津をはじめ中国の各地を訪れたが、そのたびに新たな発見があり、中国の人びとから教えられることが多かった。そして、中国と日本とは、いった

いどこが違うのだろうかと考えさせられた。最終的な結論はなかなか出ないが、王輝院長の著書に文章を寄せるといふ光栄な機会に、これまで私が考えたことの一端を明らかにしてみたい。

1. 日本に「城市」はあるのか

著名な社会学者ヴェーバーは、古代、人類の文明は、かならず都市国家の段階を経過したとのべた。メソポタミアもエジプトも、ギリシャ・ローマも、インダス文明も黄河文明もそうであった。新大陸のインカ、アステカ文明も例外でない。

都市国家とはなにか。ある民族が、外敵（異民族）の襲来にそなえて、周囲をぐるりと城壁で囲った要塞都市をつくり、そこに集中して居住する。さもないと、やすやすと異民族の征服をゆるし、滅亡してしまうのである。古代、農業の生産性は高く、農耕の適地は少なかったから、平原はさまざまな民族の争奪的となった。厳しい民族対立を生き延びるのに不可欠なのが、都市国家である。

ところが、この都市国家が、日本にはなかったのである。

*

八世紀、日本は唐・長安を真似て、平城京（奈良）や平安京（京都）を作った。白い壁や赤い柱の中国風の建物が並んだが、周囲は石垣ではなしに、ただの土堀だった。泥を塗り固めただけのものだから、台風が来ればすぐ壊れてしまう。あとは修繕もしない。要するに、造るのに手間と費用がかかる城壁など、造る必要がないと考えられたのだ。

中世や近世を通じて、日本も戦乱に明け暮れ、多くの城が造られた。しかし、日本の城は純然たる戦闘施設で、山の中か、市街を見下ろす高台に設けられる。敵が襲来すると、戦闘員（武士）だけが城にたて籠もり、住民は逃げてしまう。町をまるごと城壁で囲んだ都市など、日本には一箇所もない。ヨーロッパであれ、中国であれ、都市は城壁で囲まれているものであるという常識は、日本では通用しない。日本では、戦うのはどうせ日本人同士だから、非戦闘員（武器を取らない商人や農民や女性）には中立と安全が保障されていた。

まわりを海で囲まれた島国のため、日本には日本人しか住んでいない。そのため、日本人は外国人に慣れていない。それなのに、台湾、韓国を領土とし、中国やそのほかの諸国に攻め込んでしまった。当然、目茶滅茶をやって嫌われた。そのあと、日本はアメリカ

に占領されたが、とても紳士的な占領の仕方だったので、日本人は外国人を甘くみる癖がついてしまった。人間に対する警戒感が足りない。これが、日本人の特徴である。

*

日本人の住居と、中国人の住居を比べてみても、このことは歴然と反映している。もちろん、気候の違いもあるけれど、社会関係の違いも大きい。

中国人にとって、住居で一番大切なのは、壁である。壁があるから、家族が安心して暮らせる。壁で囲って家をつくり、ぐるりをさらに塀で囲む。庭（院子）も、敷地のまん中につくる。

いっぽう日本の伝統的な住居に、壁はない。屋根と床が基本である。家屋の様子は、外から丸見えで、垣根もないまま外の空間とつながっている。障子や襖で空間を仕切るようになったが、それも取り外すことができるのだ。こうした家のつくりは、南方の島々に住む海洋民族と共通している。日本人が「持ち家・一戸建て」にこだわるのは、こうした住居感覚の結果である。

畳はこうした、壁のない日本の住居を象徴するものだ。板の間は、冬寒いので、三百年前頃から畳（稲藁を編んだマットレス）を敷くようになった。最初それは、主人が坐る場所だけに敷かれたが、次第にはかの場所にも広がって行った。畳の下にはわざと隙間を開けて板を並べてあり、その下は空間になっている。日本の夏は湿度が高いので、風通しをよくしないとダメなのだ。中国（特に北方）でこんなふうに家をこしらえたら、冬、あつと言う間に凍え死んでしまうだろう。日本では、自然は人に優しいし、安全はタダなのである。

*

このように考えるなら、都市国家はもちろん、万里の長城まで築いてしまった中国こそが、世界基準に達した文明社会であり、日本のほうが例外なのは明白だ。

中国は世界の中心であることに慣れており、反対に、日本は世界の周縁であることに慣れている。中国人は、なんでも良いものは中国にあると思っており、反対に、日本人は、なんでも良いものは外国にあると思っている。だから日本人は、外国のものを取り入れるのに抵抗がない。そのことは本書で、王輝院長もたびたび指摘している。なぜ日本人はすぐ外国を真似るかと言えば、日本人には、それを邪魔する自尊心がないからだろう。

2. 政治が得意な中国人、政治が苦手な日本人

このように見ると、西欧と中国には共通点が多いが、正反対な点もある。なかでも重要なのは、政治に対する考え方だろう。

まず、政治というものを定義してみよう。

簡単に言うならば、政治とは、人が人を支配する現象である。ある人（支配者）がなにかを決めると、別の人びと（服従者）はそれに従う。そうした仕組みは、社会をまとめるうえで、欠かせないものである。

こうした政治の本質は、どの国でも共通だろうが、政治に対する態度のほうは、文化によって違いがある。

たとえばキリスト教の文化（イスラム教やユダヤ教のような一神教も同じ）は、人が人を支配するのは、正しくない、と考える。なぜならば、神が人を支配するべきであって、人は神に仕えるべきだからだ。人が人を支配したならば、支配者は神を冒瀆したことになるし、服従者は偶像を崇めたことになる。いずれにしても、罪である。そこで、いろいろなチェックの方法を考える。たとえば、国王の戴冠。教会が、この支配者は神への信仰を擁護するよい支配者です、という保証を与える。もうひとつは、法の支配。人びとは、神との契約（Ⅱ法）に従う義務がある。それをたてにとれば、支配者の横暴を防ぐことができる。支配者に対して、あなたも法に従え、と要求することができる。

キリスト教が、ついに民主主義を生み出したのは、こうした原則と関係がある。民主主義は、国王を支配者の地位から追放するか、単なる飾りものにしてしまつて、人民が政治の主人公になる。そして、自分たちで法律を制定し、政治を行なう人間に対して、その法律に厳格に従うことを要求するものなのだ。

*

中国の場合、キリスト教の神にあたるものがないので、人が人を支配することはタブーでも何でもなかった。反対に、人が人を支配するのは当然のこと、正しいことだと考えるのが中国の伝統だった。そこであとは、どうやって政治家にふさわしい人物を選びだし、政治を行なわせるかという問題になる。

中国人が、すぐれた政治家の条件として考えたのは、①有能であること、そして、②道徳的に正しい人物であることだった。

政治は、結果責任である。どんなに一生懸命に政治をやっても、結果が悪ければ、政治家としては失格である。中国でも、この原則は厳格なかたちで生きている。しかも中国の

場合、政治的リーダーシップを発揮するためには、中国社会の行動規範（長幼の序や親族間の権利義務）に通じていて、それを体得していなければならない。親を大事にし、信義を守り、立派な中国人として行動してはじめて、人びとの尊敬を勝ちえ、政治的リーダーとして承認される。政治家の優れた個人的資質（徳）が、政治がうまく進むために不可欠であると考えられている。徳がないと思われている人物は、たとえ有能であっても、人びとが言うことをきかないから、政治家として成功できない。

中国が科挙を採用したのは、①と②を兼ねそなえた人物を選抜する、うまい工夫であった。儒教の古典を読みこなせるのは、有能な証拠である。そして儒教の古典は、中国人の行動規範をまとめたものというわけだ。こうしたやり方が人びとの支持を集めたのも、中国では政治がそれほど重視されており、政治が崩壊したら社会が大混乱に陥るという合意があるからだ。中国人は、政治の正統性を重視する。

*

日本の場合、絶対神の考え方がないのは中国と同じだが、人が人を支配することにはなんとなく抵抗がある。政治があるのは仕方がないが、できればなしで済ませたい、とたいの日本人は考えている。たとえば、中国から昔、律令という立派な政治制度を教えてもらったが、時間がたつうちに有名無実になってしまった。最近ではアメリカから民主主義を教えてもらったけれども、実際に運用してみたらまったく日本流になってしまった。日本人は、政治が苦手なのである。

どんな社会も実際には、政治なしで済ませることはできない。しかし、日本人は、政治がなかったことにしたい。日本人は、誰もがみんな平等であると思いたいので、支配がわからなくなること好まないのだ。そこでリーダーが何かを決める場合でも、反対がなくなるまで待つ。そして、自分の思いどおりの結論が出たあとも、これはみんな決めてたことだと言い、自分が決めたとはけっして言わない。そのほうが、リーダーは責任を追及されないから安全だし、部下もリーダーが独走しないから安心なのである。

日本人のつくる組織は、たいてい、リーダーがいるのかいないのかよくわからない。そのかわりに、その誰もが、この組織は自分のもの（うちの会社、うちの部、……）だと思っている。帰属意識が強い。そこで、家族をほったらかして働き続ける「会社人間」が続出する。本来、会社や学校のような組織は、ある社会的な機能を果たしていればよく、それ以上のものではない。しかし日本では、まわり中の人間がみなそうなので、自分もそうしないと立場がなくなってしまう。あらゆる組織がいつの間にか、共同体（全

人格を受けとめ、生きる目的を与える集団）になってしまっているのが、日本社会の特徴だ。

3. 信じられる人間を探す中国人、信じられるものを探す日本人

このことと関連するのが、中国と日本における人間関係のあり方の違いである。

中国人からすると、日本人はなんて冷たいのだろう、とみえる。大事な友人や親戚に、頼みごとをしても断られる。仲がわるいわけではないのに、である。そこで、日本人はなにを考えているのかわからない、冷たい民族だ、という感想になる。

いっぽう日本人からすると、中国人は依怙（いき）の二重人格にみえる。知らない人間に対してはじつに素っ気なく、親切でもない。それなのに知り合いに対しては、手の平を返したように、まるで態度が違う。中国は公平でない、コネ社会だという感想になる。

どちらの感想も、間違いだとは言えない。しかしそれは、自分の国の基準を、相手に当てはめてしまった、一方的な感想である。相手の国のことをもっと知れば、別な理解も可能になってくる。

*

中国で、一番大事な要素は政治である。政治が乱れたり、異民族が侵入したりすれば、社会秩序は目茶苦茶になってしまう。もちろん、土地や家や財産も、なくなってしまう。命からがら、知らない土地に逃げのびることになるかもしれない。そんなとき、最後に頼りになるのは、親戚や友人である。そこでふだんから、将来や万一のことを考えて、そういう関係を大切にしておく。それが中国の伝統的な道徳でもあったし、一種の保険としても機能してきた。

中国の人間関係は、まったくの無関係（潜在的には敵対関係）から、もっとも大事な関係まで、何段階もある。そして、相手がどの段階なのかによって、行動様式が変化する。商売でいえば、とんでもない高値をふっかけるか、思い切って割引するか、お金はいらないから持って行きなさいと言うかは、相手次第なのである。そして中国人は、これが当たり前だと思っている。このことが、日本人にはとても理解しにくい。

日本は、中国に比べればずっと平和だった。中国に比べて、日本の政府や権力は弱体である。戦争はあったが、一般民衆の生活にはあまり影響がなかった。自分が私有している土地や家財を取り上げられたり、強制的に別の土地に移住させられてしまう、なんていうことは、歴史上一度もなかった。あべこべに、国有地も、いつの間にか私有地（貴族の荘

園や、開墾した農民自身の土地)になってしまい、それを誰も不思議とは思わなかった。
(日本の土地は、千二百年前の法律から言えば、すべて国有地のはずなのだ。)

何かを所有していても、それをほかの人びとが承認してくれないかぎり、ほんとうに所有できているという保証がない。日本には、その保証があった。だから日本人は、ものを所有することにこだわる。兄弟や親戚も、遺産相続がからめば仲がわるくなってしまいうから、信用できない。友人など、もっとあてにならない。最後に頼りになるのは、ものなのだ。

*

中国人から見ても、日本社会の人間関係が希薄に見えるのは、日本人が、「場」を基準に行動するからであろう。

日本人にとって、会社や学校は大事な集団である。しかし、会社をやめたり卒業したりして、いったんその集団を離れると、原則として無関係になってしまう。それどころか、会議をうっかり欠席したりすると、無視されて話が先へ進んでしまう。つねにその「場」に参加していないと、その集団のメンバーとはみなされないのである。これらの点は、中国の「単位」とだいぶ違っているはずだ。

日本人にとって大事なものは、自分がいま所属している、「場」としての集団である。それが、忠誠の対象だ。親戚や友人は、その「場」にいないから、何の影響も持たない。同じ会社のなかでも、たとえば営業から経理に異動すると、昨日までと言うことが違ったりする。「場」が変わったせいである。こうした社会では、人間と人間のあいだに、固定的で安定した関係を結ぶのはむずかしい。

日本人のこうした行動様式は、近代化にプラスになった。「場」の外側の人間は、親戚・友人だろうと知らない人だろうと、区別がない。そこで、役所を規則に従って運営することも、誰に対しても同じ値段でものを売ることもできる。さもないければ、合理化・近代化のために不可欠な、計算可能性の生まれようがない。

4. 二一世紀は、なぜ中国の時代なのか

中国を理解する場合、もうひとつ忘れてはならないのは、漢字である。

漢字は、世界に例のない、表意文字である。数多くの国々が戦乱を繰り返した戦国時代に、現在に近いかたちに整理されてきた。

古代の中国人は、なぜ表意文字を採用したのか。それは、当時の中国が、多民族の紛争状態にあったからである。もしも中国が、ひと続きの大陸でなく、地中海のような海やアルプス山脈のような山で隔てられていたなら、現在でもヨーロッパのように多民族のままだったろう。

実際問題、北京語と広東語は、言葉という点からみれば、英語とイタリア語よりも違っているかもしれない。しかし、どちらも中国語であるのは、漢字のおかげである。漢字が出来た当時、中国にはまだ中華民族なるものは存在しておらず、それぞれの地方の人びとがそれぞれの言葉を喋っていた。漢字は、音でなく意味を表すので、その意味を、それぞれの地方の読み方で発音できる。表意文字であればこそ、もともと異なった民族からなっていた中国を、文化的に統一し、ひとつの国家にまとめあげることができた。

漢字を使い始めてから、人びとの話言葉にも、たぶん変化が生じた。それまであったかもしれない、時制や人称変化や活用などといった現象は、消え失せてしまった。なぜなら漢字は、絵文字のようなものであり、そうした変化を表すのが苦手だからである。その意味で、中国語は、多分に人為的な言語なのである。

ヨーロッパではいま、多数の国家や民族を統合した、EU(欧州連合)を結成する準備が進んでいる。これが成功すれば、ヨーロッパはやがて、国家を越えた国家、ひとつの政治的・文化的まとまりとして姿を現すはずだ。いっぽうの中国は、大陸のもうひとつの端で、二千年も昔に民族統合をなしとげた、中華連合なのだ。こうした中国の経験から、世界は多くを学ぶことができるだろう。

*

過去一世紀以上にわたって、日本と中国は、まったく対照的な道をたどった。

中国は、毛沢東による中国革命の成功という輝かしい成果をおさめたが、それでも総じて言えば、停滞していた。考えてみれば中国は、歴史のほとんどの期間、世界最大の大国であり続けてきたのである。それとの比較で言えば、二〇世紀に中国が置かれていた状態は、中国本来のものではなかった。しかし、鄧小平の改革開放政策以後、中国はようやく順調な発展を始めた。このまま行けば、中国は近い将来、世界最大の大国の地位に返り咲くだろう。

そのとき、中国の前に、どのような世界が開けているだろうか。

日本がひと足先に、発展への道をたどったのは、日本が伝統文化にこだわらなかったからである。いっぽうの中国は、やすやすと伝統文化を捨て去ることができなかった。中国

は自国の文明や制度に自信を持ち、それが世界標準であると信じていた。しかし、ヨーロッパ世界は、もうひとつの強力な世界標準をもち、宗教・価値観・科学・技術・社会制度をもっていた。そのことを中国がほんとうに認めるのには、まだ時間がかかりそうだ。

日本と違って、中国は、固有の伝統文化を色濃く残したまま、超大国として登場することになる。中国の歴史を考えるなら、中国にはその資格があると言えるだろう。これは、この数百年間をヨーロッパ文明中心に過ごしてきた世界にとって、まったく新しい経験になる。中国が、伝統的な価値観と欧米の価値観との対立を乗り越えて、人類文明の新しい段階について新たな提案を行なう。——漢字を生み出し、諸民族の統一をなしたとげた中国には、それができると期待したい。

5. 中国人は、日本のなにを参考にできるか

中国は、それ自体がひとつの宇宙であり、世界であるために、かえって外の世界に目を閉じてきた。もともと辺境だったヨーロッパや日本は、中国が目を閉じているあいだに、貪欲に外の知識を吸収した。

王輝院長の紹介する日本の点描は、中国のすぐ隣りに、中国とはまったく違ったメンタリティーの人びとがいることを教えている。人びとの暮らしのスタイルやものの考え方、町の様子など、中国と日本の意外な違いに誰しも興味をそえられるだろう。また、それぞれの国を生きて、人びとの情とも言べきものは世界共通なのだあと、ほのぼのとした気持ちにもさせられる。

経営管理のやり方や交通システムの整備など、細かな点を別にすれば、超大国への道をまっしぐらに進み始めた中国が、いまさら日本に学ぶべきところがあるとは思わない。中国は、これまでも中国流の道を進んできたし、これから中国独特の道を進むことになるだろう。ただ、それがどういふふう中国独自の道であるのかを、中国の人びとがよくよく認識するのには、隣国の島国・日本の経験を知っておくことはなにかの参考になるかもしれない。

*

中国が日本のように、伝統文化をどんどん切り捨てて近代化を進めるのなら、中国そのものが同一性を失って解体しかねない。いっぽう、中国が独自の価値観や流儀にあまりにこだわるならば、国際的な対立が深まる。人権問題をめぐるアメリカと中国の角逐は、そ

の前哨戦かもしれない。

そこで、両者の中間の道——中国が、中国文化の独自性を保ちつつ、世界との協調をはかる道——が、可能であるし望ましいと、私は思う。そのためには、これまでどちらかと言えど内に向きがちだった中国の、より多くの人びとが、日本をはじめとする外国のさまざまな文化に対して、興味をもち、理解し、できれば共感することだ。中国の人びとが、そういう余裕と自信をみせるなら、二一世紀の地球社会に、希望を持っていると思う。